

---

# コンビニ強盗

鈴木

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コンビニ強盗

### 【Zコード】

Z2196P

### 【作者名】

鈴木

### 【あらすじ】

生徒会長の創と麻はサバサバ系カレカノ。いつものようにコンビニで買い物をしていたら、何とコンビニ強盗が！ここは怖がるところ！と思ったら、なぜかその場に居合わせた人たち皆何処かされている人たちで・・・？！

誰か、今何が起こっているのかを20文字以内で俺に説明してくれ。

## 【コンビニ強盗】

「金を出せ！」

その一言が店内に響き渡った時、俺と麻はパンを選んでいるところだった。焼きそばパンと、カツサンドの良さ悪さについて彼女と話し合っていたその時に、タイミングよく黒い服を身にまとった20代半ばの男性が入ってきたのだ。その時は、焦るだの怖がるだの、そういうた感情は一切なく、ただ何が起こっているのかが全く分からなかつた。それは麻も同じなようで、初めは彼女もポカンと口を半開きにさせてドア付近の男を眺めていた。強盗らしきその男は周囲が静かになつたのを確認すると、靴の音を立てながらカウンターまで行って、店員に銃を突きつけた。人差し指はレバーに引っかかるつていて、一言でも逆らつたら撃ち殺してやるぞという無言の脅迫が聞こえてきた。

しかし、俺の隣でパンを選んでいた麻は最初こそは驚いたものの、店員が銃を突きつけられたあたりから激変する状況についていけなくなつてしまつたらしく、遂にはこの状況下で俺に「早く選ばない？」と言つていつもの天然ぶりを見せつけた。

「いや、今そういう状況じゃないと思う

強盗様にさつきの麻の発言を聞かれなかつたことを願いながら、俺は小声でそういった。しかしそんな俺の頑張りもむなしく、麻はいつもと同じ声量で俺に返事をする。

「そう?私たちのほうが先にここに来たんだから、順番的には間違

つていないとと思うんだけれど

「そういうことじゃなくて……」

静かにしないと殺されてしまうかもよ、と続くはずだつた俺の言葉はほかの人間の怒声によつてかき消されてしまった。

「おいセイ、何をやつていいー！」

俺は、ああなんといふことだと思いながらかけていた眼鏡を中指で力チツと上に押し上げた。男は、右手に銃、左手にレジから無造作に取つてきた札束を持つていて、顔にはよくテレビで見るような強盗犯用の黒いマスクをかぶつている。何といふか、すぐ不格好だ。

「持つているものを全部床に置け。……早くー！」

俺は氣づかれぬよつに深くため息をつくと、学校指定のカバンをゆっくりと床に置いた。それからもう一度眼鏡を押し上げ、時計を見て、今日はもう塾には行けそうにないなと思った。俺は毎日3時から塾に通つていて、それまで麻とコンビニに来て時間をつぶすのが日課となつてゐるのだ。しかし時刻はもう2時半。塾まで30分以上はかかるために、今日はもう間に合わない。まあ、1日ぐらい行かなくても大丈夫だらう。たぶん。

「おい、お前もだ、そこのパンを持つてこい！ニースカの女

パンを持つているスカートの女といえど俺の隣に立つてゐる麻以外に当てはまるはずがなく、思わず苦笑した。ミニスカの女といわれて自分の彼女が黙つているはずがないと解つてゐたというのもあつたが、本当は彼女が手にしていた蒸しパンが音を立てて袋ごと握りつぶされる瞬間を見てしまつたのだから笑うしかなかつた。

「お言葉ですが、ひざ上一センチメートルはミニスカと言いません。

それは一通りに一通りしゃる生徒会長様が証明してくれますよ。それから、私はパンが欲しいだけなので早く買わせていただけませんかね。貴方でいいわ、今のところ店内での権力者は貴方みたいだし、丁度お金も手にしてる。ほら、これください

そう言つて麻は強盗の元へと歩いていくと、手にしていた蒸しパンを差し出した。強盗は、それを不思議そうに見つめると、眉間にしわを寄せ、顔を赤くさせた。麻との付き合いはもう半年以上になるが、これほど肝の座つた女だったのかと改めて感心した。本来ならば「ああ敵を怒らせてしまったぞ」と嘆くシーンなのだろうが、この時俺は妙な事に気が付いてしまい、気づいたときには口を開けて言葉を発していた。

「あれ、結局焼きそばパンはやめたのか？」

その一言が店内中に響き渡り、消え入る。目の前の強盗をないものとするかのように俺は麻にそう聞いた。麻はそれを聞くと、うーんやつぱりあれも捨てがたいのよね、と言つて蒸しパンを元の棚に戻して焼きそばパンを手に取つた。

「俺はやつぱり、カツのほうがいいと思う。栄養のバランス的にも、お前は少食だから、スタミナをつけないといつか倒れるんじゃないか？」

「そういう会長だつてサラダ田和じやない？」

「俺はいいんだ、別に動き回らないから」

「模試試験中にぶつ倒れたら洒落にならないと思うんだけど？」

「今日はこの状況だ、塾なんて行けやしないだろ？」「

「それも、そうね。じゃあ今日はゆっくり話ができるて丁度いいわ

「いや、待て。俺強盗だぜ？お前らいこ加減にしろよ」

麻はうーんと唸つてから焼きそばパンを取り、レジのところにすたすたと歩いて行つた。そして、必要なだけお金をレジ台上において、また帰つてこようとした。が、すぐさまレジ担当のバイト店員に呼び止められた。

「ポイントカードはお持ちですかー」

\*\*\*

ぼさぼさの髪。

すべてを諦めたようなまなざし。

如何にもやる気のなきやつた表情。

そのレジ担当バイト員は、そう言って麻を呼び止めた。ポイントカードといつのはこの店の物ではなく、ある種のパンを買ったものがポイントをためて賞品をもらいつといふ、所謂シール集めに似た制度だ。シール制度だと、シールだけを剥がして逃げ去る人間がいて商品にならないと思つた菓子パン会社が思いついた「名案」というやつだ。

「持つてないけど、何がもらえるの?」

「今はミニミニファ開催中ですのでー、ミニミニのお皿とかーそんなんでーす」

「じゃあ一枚作ってくれますか?」

「あーい……」

全くやる気があるのかないのか、変なところでまじめな奴だなと俺は思った。普通このような状況で普通に客の注文に受け答えする人間がいるだろうか。もしいるとしたら、相当な仕事好きか、……ただのバカだらう。

一氣において行かれてしまつた強盗はパニック状態に陥り、  
「待て、待てよ！動くんじゃねえ！撃つぞ！ほら！ほら！」  
と銃を振り回していたのだが誰も相手にする様子はない。

もつひとつしてよいか解らなかつたのだろう、確かに強盗に入つてこ  
んなに邪魔をされてしまえば自棄を起こしたくなるのもわかる。い  
や、強盗に入った時から既に起こしていたのかもしれないが。強盗  
はマスクを外すと興奮した様子で俺と麻に向かつて交互に銃口を向  
けた。マスクをとつた彼の第一印象は「好青年」で、ひげもきちんと剃つてある、ヒリートと言われたら納得できるような顔立ちだつ  
た。だから俺は彼を、好青年と名付けた。そのままだ。

「お前ら、いいかげんにしろよ？ この銃には本物の弾が入つてる  
んだぜ？ お前ら付き合つてるんだろ？ ビッチかが死んだら困る  
んじやねえ？」

尚も興奮気味に、息を荒げ、目をかきぱらいで好青年は俺にそう言  
い放つた。ついでに弾が入つていてることを証明するために、「こ丁寧  
にも一発天井に向かつてノズルを引いた。体育祭で聞くあの音が、  
店内に響き渡る。俺は、ああ面倒くさいとばかりに一步前に出ると、  
目を細めながらまた眼鏡を人差し指であげた。

「別に付き合つてしませんけど」

そう俺が言つと、好青年はきょとんとした顔になる。

「付き合つてしませんよ。彼女はうちの学校の生徒です。麻を撃つのは生徒会長として許せる」とではないですけどね。」

なんだか本当に相手が可愛そくなつてきたのは口が裂けても言え  
ないが、もし俺が神様なら彼にもう一度強盗のチャンスを与えてや  
りたい。

「付き合つてによつが、付き合つていまいが、そこからあと一歩で

も動いたら発砲する！解つたな！」

「こんなとき、付き合っている相手が麻で良かつたと思つ。またねちねちとひるさい様な女子と付き合っていたのならば、後々「私のこと好きじやなかつたの？」等と面倒なことを問われるに違いないのだ。麻は、そういうタイプの人間ではない。付き合つて間もないころは、我慢して居るのかと思い色々と氣を使つていた事もあつたが、そうではなかつたらしい。彼女はそういう事を気にしない、視点を変えた言い方をすれば理解力のズバ抜けている人なのだ。勉強も、運動も、人並みもしくはそれ以上にできるし、友人も少なくはない。所謂「理想の像」というやつだろ？。

「じゃ、じゃあ！　お前だ！　お前はもうこれで動けない、解つたら金を出せ！　早く！」

そう言つて好青年が銃口をレジ担当のバイト員に向けた時、コンビニ自動ドアが開いて聞きなれた入店メロディーとともにどすの利いた声が響きわたつた。

「黙つて手を挙げろ！　それから店員は金を出せ！　早く！」

(後書き)

昔にかいた小説が出てきたので載せてみました。  
この後どうなるのかは皆さんの「想像にお任せします(、 )」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2196p/>

---

コンビニ強盗

2010年11月30日11時10分発行